

## ドン・ジュアンに観るバイロン像

楠 本 哲 夫

《<sup>ドン・ジュアン</sup>Don Juan》はバイロン文学の総括であり凝結である。Byron は英国最古の由緒ある<sup>ブルン</sup>Brun 家の第六代 バイロン卿として 北欧バイキングの血をそのままに受けつぎ、祖先の勇武の栄光は<sup>クレデ バイロン</sup>‘Crede Byron’の信条として 彼の36才の生涯に貫かれた。

Byron は ジョージ・ゴードン・バイロンとして ケルト民族の誇りをジョンブルの精神をそのままに生きた。熱血の<sup>ほとばし</sup>迸るままに行動し その激情を紙面にたたきつけた。若き日は＜喧嘩バイロン＞として吼える如く 晩年はむしろ 揶揄、笑殺する如く人の世の<sup>うつ</sup>虚ろなる相を 訴えた。バイロンの生涯をかけて追求したものは＜緑濃き島＞、それは《完成》の<sup>すがた</sup>相だった。人間は死によってのみ＜完成の郷＞へと入ることができるのだ信じ続けた。＜不完全＞な自己を、人の世を、<sup>みつ</sup>凝視めて＜完全＞を追求することがバイロンの理想であった。だからこそ 不完全な人生を 社会を 徹底的に模索し 追求し、偽らざる自己を生き表明したのであり、その意味で蒙を<sup>くら</sup>啓き 旧弊を打破し 明るき世代への革進を願った典型的 行動詩人、革命詩人、投影詩人であった。

＜詩が 人生批評、社会批評である＞ とするならば バイロン文学こそ 英文学の最高峰に位するものであろう。そして《ドン・ジュアン》こそ、バイロン文学の集大成であり総括であり凝集であり、千古不滅に<sup>かがよ</sup>耀う、万人の吐息して仰ぐ金字塔である。

あの口やかましい、Oxford 大学、詩学教授 Mathew Arnold は「バイロ

ン文学の光りは、バイロンの人格はその<sup>誠実</sup>sincerity と<sup>力</sup>power に在り」 と力強くバイロン文学の不滅性を訴え、讃えている。

大衆と共に生き、最古の名門貴族出身故にこそ、その腐敗墮落した貴族社会の実態を熟知したとき、これを徹底的に敲き、叛逆した、その苦悩と闘いながら 決して自己を偽らなかつた、妥協しなかつた。〈空念佛〉〈偽善〉を極度に唾棄すべきものとして嫌悪し 排除し 激しく 行動的に 自らの驚ペンを執って筆誅を加えた。それがバイロンの生涯であり、人間バイロン、詩人バイロン、バイロン文学のすべてであつた。そして それが≪ドン・ジュアン≫の 詩精神のテーマ であつた。

バイロン自身、明言した。「私は 何事においても〈経験〉という素地がなければ 詩を書くことができない」と。

バイロンは哲学者ではない。〈徹底した自我の詩人〉である。彼は思索力を欠く。瞬間の現象を方寸のカメラに、ものすごく、迅速に、格別に鮮烈に捕えてゆく。感受性の強いバイロンにとって 論理の糸をたどり、思いきわめることは 不可能であつた。

ゲーテは バイロンを〈十九世紀最大の天才〉と絶大な讃辞を贈つた。そのゲーテが 「バイロンは思索するときは子供であつた」と評した。即ちバイロンは 一貫した抽象的理念を把握せず、直観直入により流れゆく瞬間の現象を力強く鮮烈に捕えたのであり、継続的思索により理念を養うことはできなかった。バイロンは 自分自身については暗黒であつた」と評した。

滾滾と湧き出る泉の如く バイロンの心に捕えられた 瞬間瞬間の外界の現象は、刺激は、そのままに、心象よりくり出される清水となり、そのままバイロン詩として 流麗なメロディを奏でていった。その熱き想いの冷えざるう

ちに、喜怒哀楽をそのままにうたい続けた、休むことなく。

《チャイルド・ハロウドの巡礼》は 地中海周航の旅の印象記というよりも バイロン自身の経験、心の遍歴として全ての読者はこれをうけとめた。

《<sup>コルセア</sup>海賊》は コンラッドは バイロン自身である。《コリンスの攻囲》のアルプは バイロン自身の心象であり経験である。

《マンフレッド》は 漂泊らう、苦悶する自らの心の投影に他ならぬ。 自らの自叙伝であった。

《ドン・ジュアン》は 世の歓楽を極め ありとあるゆる迫害に敢然と闘い 辛酸の苦様を味った果てに その晩年において、 その悪罵の筆をもって 忌憚なき自らを世のあらゆる偽善、空念佛と 対決させた姿である。

バイロンが 最高の、そして、最後の、理想的女性によって詩情を駆り立てられ 情念の世界に炎えつつ《ドン・ジュアン》の大作に挑んだすがたを探り 究めるとき、数奇な運命を歩んだ 徹底的 自我の詩人の苦闘の軌跡を読みとることができるのである。

流滴の樂園にあって テレーザとの生活を満喫しながらも、泣き笑い、怒り 苦しむ姿を明らかに 汲みとることができるのである。

《ドン・ジュアン》 はバイロンが畢生の情熱をふりしぼって 生みの苦しみを味いつつあらゆる世の迫害、最も親しき知友の反対をも押切って誕生させた バイロンの血涙の所産である。

おのが生命の炎 燃えつきんとして その燈心の明滅を凝視しながら 己が生涯の集大成として 紅血を絞りつつふるえる手に、最後の残れる力をふり絞って 鷲ペンを執った、是が非でも 誕生させたかった、バイロン生涯の集大成

として 喘ぎ喘ぎ 生みの苦しみの中に 呱呱の産ぶ声をあげたのである。

全十六篇 一万六千行よりなる。その長さにおいて有数であり 内容において 失恋<sup>セパレーション</sup>、別居、迫害、追放、孤独、痛苦とあらゆる遍曆を重ね広汎多岐にわたり 世界文学史上、ミルトンの《失樂園》以後 最高峰を極めた 謂うなれば バイロンの生涯の集大成である。

バイロンの最大の特色たる徹頭徹尾主我的強烈な個性が無遠慮に投影された作品であり、あますところなき人生批評、社会批評として読者を魅了し 惹きつけてやまない 大作である。 未完で バイロンは筆を絶ったが ドン・ジュアンの その後の行方を なお 求めて 最後を見究めたい衝動に駆られる作品である。

しかし 作者の意図は そのストーリーの展界にあったのではなく、人生批評、社会批評にあったので、むしろ、自らの人生経験、社会への忌憚なき意見がゆったりと謳われた。

バイロンの詩作に最も適した イタリーで発見、開拓した アターヴァ・リーマ の詩型を用いて 脱線を繰返しつつ 急轉換しつつ、自由奔放に 自分の心眼に映じたままに、気軽に 笑殺しつつ 悲憤慷慨しつつ 痛罵を浴びせつつ 諷刺しつつ気のむくままに脱線をくり返し、わき道へそれてゆきながら ゆったりと ストーリーを、お茶の間の閑話風に展界していった。

故に読者は 流麗な女性顔を多用されたこの大作に飽くことなく、そこに バイロンのすべての人間像を垣間見て はっと驚き、かつ微笑<sup>ほほえ</sup>みながら、また、滋愛<sup>こころ</sup>の情を讃えながら、苦悶の姿に 胸を刺される如く感動し かつ、遊蕩三昧の描写に自らも 陶醉しながら 無我の境地に誘いこまれていった。

《ドン・ジュアン》の、あってなきが如きストーリーの展開を概観するならば――

ドン・ジュアン —— スペイン読みでは ドン・ファン —— は 十四世紀頃 スペインのセヴィルの町に住んだと言われる伝説的人物である。

放蕩無頼の人物で 好色と放縦の代名詞、マダムキラーの代名詞として通用している。これを材題として 詩文 戯曲 小説が世界各国で数多く編まれている。

バイロンの《ドン・ジュアン》は（前述の如く）十六篇、一万六千行よりなる驚くべき長篇詩で その長さにおいても 世界詩壇有数の作品で、しかもその取扱った内容の広汎多岐にわたる点、卓越した人生批評の名作である。

物語は ドン・ジュアンが 少年として、南スペインのカディースの町に生いたつところから始まる。母は、夫と別居し 女手一人で ジュアンを育てる。

この母アイネーズという女の辛辣な描写は バイロンと離別した妻アナベラへの筆誅である。

アイネーズはドン・ジュアンを形式的には完全無欠に育てる。だが16才で恋を知り、母の親友ジューリア23才（夫は50才）と不倫の関係を結び、その仲を夫に発見され、格闘の末、ジュアンは 彼を殺す。

ジュアンは町へ住むことができず 母アイネーズは ジュアンを舟で異国へと旅立たせる。舟は途中 暴風雨に遭<sup>あ</sup>い、難破する。奇蹟的にジュアン一人助かり、ある島へと人事不省のまもうち上げられ、こんこんと磯に眠り続ける。

この難破の描写は 流麗な名文として人口に膾炙する。

ジュアンは並外れた美少年である。そこへ通りすがりの、美少女ハイデーはジュアンを一目見て魅せられ 供<sup>とも</sup>の腰元の力を借りて巖間の洞穴に彼を運びかくまう。そして毎日食事を運ばせ 介抱する。ジュアンが正気ずいたとき彼は少女ハイデーの腕の中に抱かれている。ハイデーはジュアンに恋をささやく。当然のことながらその情をジュアンは返す。

かくて バイロンは 歌う。それは バイロン詩のメロディに流れゆく女への愛の虚<sup>うつ</sup>ろにして、はかなく、空に消ゆることへのバイロンの心情達観である。

まずあたえよ	酒と女と諧謔と笑 <sup>あは</sup> らぎ
醒 <sup>さ</sup> むれば	冷 <sup>さ</sup> むき説教とソーダ水

そのような二人の恋を唄い 結婚に及んで彼は歌う。

すべての悲劇は	死で終り
すべての喜劇は	結婚 で終る。

バイロンの対女性観はつねに線香花火の如く、瞬間炸裂して 空に消えてゆく。バイロンにとって愛は、恋は、生命ではなく、とまり木である。はかなく消えゆくことをバイロンは熟知している。

しかし 二人は結婚したのではなかった。実はこの島は 海賊の根據地でハイデーは海賊の首領の娘であった。

父が掠奪のため荒海へと乗出した留守中、ハイデーはジュアンを家へ連れ込み 酒地肉林の宴を続ける。座興を添えるためギリシャの楽人を呼び 豎琴

に和し　サーモピリーの歌やマラソンの賦をうたわせる。

千変万化の筆致で流麗に描かれ、清純な恋を高揚するかと思へば、結婚を揶揄し、肉感を描き、悲壯愛国の賦をうたうかと思へば、突如、恋人が夕暮れどきに　祈りをこめて　アヴェ　マリアを歌う。その千変万化の筆致はバイロンの至芸である。

歓楽の宴　半ばにして　海賊の首領の父、帰館する。烈火の如く怒りジュアンを一刀のもとに斬りすて　氣息奄々のジュアンを奴隸として売るべく　奴隸船にのせ　沖合に出しコンスタンチノーブルへ向かわせる。船中で病癒えたジュアンは　コンスタンチノーブルへ着くや　奴隸市で　サルタンの第一夫人の従僕に買われてゆく。

サルタン夫人の命により女装させられ　大広間をいくつも通りぬけ夫人の居間に連れてゆかれる。とりまく美人の中でも群を抜いたジュアンの美貌に夫人はすっかり歎び　恋を語ろうとする。　そのとき　突然　室外に　「サルタン入御」の声がする。

急いでジュアンは他、数百人の妾達と室外に出されるが　空室なきため　ドゥードゥーと同部屋に入れられる。翌日　これを知った夫人は　ジュアンをドゥードゥーと秘密の水門から輕舸でボスフォラスの海に流す。いのち永<sup>なが</sup>らえて、交戦中の露都両軍の激戦地　イズメールにたどりつく。

このイズメールの包囲戦は　愛唱される戦争描写の幾千行≪ドン・ジュアン七、八編≫であり凄惨な戦争を活写したバイロンの戦争反対論を如実に示したもので、　時代先行思想として炯眼に値する、特筆大書すべきものである。

かくして露軍に身を投じたジュアンは　露の都に凱旋しカザリン女帝に謁見する。　カザリン女帝は　ジュアンの美貌にうたれ寵愛する。ジュアンはかく

て高官に昇り、人もうらやむ榮華を極めるが、そのうち 極度の神経衰弱となる。

そこで「病を医する途は しばらく露都を去って外国宮廷に暮すにあり」との医師の進言に従って 外交官として英京ロンドンに赴く。

バイロンは 主人公を、かくして祖国英国へ連れて行くのである。

ドーヴァー上陸の光景描写は かつて追放の身を ゼノアの客舎で恋々と祖国を思ったバイロンの心境である。 イタリアでの放浪の身を テレーザとの<流滴の樂園>にあって、なほ、かつ 消えざるものは 拭いがたい 祖国への郷愁であり 深く心の奥に巢喰<sup>パーソス</sup>った哀感であった。 Byron is poor! かわいそうな バイロンよ!

最後の愛人テレーザは 結局 バイロンが<ドン ジュアンを 英国に帰す>ことを とても怖れ 予知したので《ドン ジュアン》の世に出ることを 猛反対したのであろう。<ドン・ジュアンが 結局、緑濃き島、英国におもむく日 自分だけは ついてゆけないのだから>と、とても 愛をかけたバイロンゆえにドン・ジュアンに嫉妬めいた女心故に ドン・ジュアンが 陽の目を見ることにとても不安を感じ、その出版に猛然と反対した その気持も よく肯けるところである。 バイロンは《ドン・ジュアン》の出版には、親友の、詩友の、世間のすべての猛烈な反対にもかかわらず、敢て、自分の文学生命をかけた。あらゆる迫害と斗いつつ この作品を世に出したバイロンの心情の中に 帰心矢の如きものがあったことをはっきりと読みとることができる。まさに筐底に埋もれんとした《ドン・ジュアン》がすばらしい名作として陽<sup>ひ</sup>の目を見ることになったのは、肝胆相照した、若き詩友、天才詩人、シェリーに見出され、彼の熱烈な激励と絶大なる評価、讃辞の賜であったことを銘記されねばならぬ。



バイロンは ジュアンをして英国貴族社会に活躍させる。 燃ゆるが如き反貴族思想をもってトーリー貴族を笑殺懲殺する。

<sup>ストーリー</sup>  
物語はジュアンが貴族の荘園に招かれて、狩猟と夜宴の日を送る記事で終わっている。 それはニューステッドの僧院の光景である。そして黒衣の僧の幽霊のところでまでニューステッドのことばかり描き続ける。バイロンの心に今去来するもの、それは 幼少時代、ハロー、ケンブリッジ校、そして姉オーガスタとわずかの間だったが同棲した、彼の最も懐しい故郷への絶ち難い郷愁であろう。

その幽霊の正体をつきとめようと夜ふけまで起きているジュアンの部屋の外の廊下に、はたして夜陰に物の怪が現われた。おどりかかって頭巾をはずしてみると それが美しい フィッツ・ファルク夫人であった。

というところで、一万六千行の詩が突如として終わっている。

彼はここまで記したときに ギリシャ義勇軍を起こし イタリアと詩作を後にして戦場に向かったため この後を続けて描く機会なくして36才の生涯をミソロンギの地で絶ったのである。 この長編が未完で終わったことは 別に大した差異はなかったので、ストーリーの展界とは全く無関係に この《ドン・ジュアン》には バイロン自身の人間性、バイロン文学の あますところなく述べつくされている いうなれば バイロンの世に贈ったすべての唄の集大成だったのである。

《ドン・ジュアン》の文学的価値を考えると測り知れぬ、バイロンの奥深さと神秘性を探ることができる。晩年のバイロン（ドン・ジュアン）が自らの口で 宿命の星のもとに生れ 奔放に生きた その短かった生涯の軌跡を刻明に語っている。

バイロンが最高の、そして最後の理想的女性テレザ・グィチョーリ 伯爵夫人によって 詩情を駆りたてられつつ情念の世界に炎えつつ《ドン・ジュアン》の大作に挑んだ相を究めるならばバイロンは 自分の死期を予知しつつ宿命的生涯の軌跡をしみじみと回想していた。 だからこそ、この大作に異常なまでの執念をもやし 彼の詩作生命をかけた。

幸運にも そのとき バイロンは 流浪の地において 水を得た魚の如く、アターバ・リーマの詩風を発見し、自分に最も適した詩型であると確信した。

1815. 3. 17 (バイロン27才) 妻アナベラと離別した後、＜永遠に祖国の土は踏まず＞と決意し 《さらば 汝よ》 Fare Thee Well! のアナベラへの訣別の詩をかき、直ちに 4. 25日 ドーヴァーから、オステンドへ出帆しギリシャ ミソロンギで不帰の客となる迄の10年間を＜追放、流浪＞の生活を送った。

その頃 バイロンは 心身共に疲れ果てていた。 Byron is poor! かわいそうな バイロンよ、その主旋律は バイロンの生涯 消ゆることなく 奏でられたが、この頃のバイロンは、<sup>さすが</sup>流石に失意のどん底に<sup>あえ</sup>喘ぎ 苦悩していた。

その失意のどん底にあって 矢継ぎ早やに作品をかいた。詩作によってのみバイロンは 自己の苦悩を慰めることができた。 詩作こそ、唯一のバイロンにとって 苦悩する、揺らぐ、荒れる、沈む心の救済、慰藉であった。

1815. 5 《チャイルド・ハロールド》第3篇を書き始め 7月完成。1816. 6. 27 シヨン城を訪れ、《シヨンの囚人》を、7月《夢》、《オーガスタに献げる賦》をかく。 9月17～29、ホブハウスとアルプスを旅して詩劇《マンフレッド》を起稿、1817. 2 脱稿。

1817. 5. 26 フェラーラで《タッソーの悲しみ》を詩う。

1817. 6 《チャイルド・ハロールド》第4篇をかき始める。9月完成。

矢継ぎ早やに詩い乍らも それらは バイロンの心の揺れであり、不安であり、苦しみであり、悶えであり、それを抑へ しづめ、和らげるための詩作こそ唯一の、バイロンの生きる方途であった。 発狂を救う道だったのである。

さもなくば バイロンは狂ったであろう。 それは バイロン自らがしばしば口にした言葉である。

バイロンは この頃 たしかに 行詰っていた。自らの詩風に行詰りを感じていた。 自らの詩風に行詰ることは 投影の詩人であるバイロンにとって 即 みずからの行詰りを意味した。

＜黒い喪服を纏った憂愁な人物＞として登場する Byronic image が トレードマークとして マンネリズム化した詩風に行き詰りを感じたとき、これを打破し 自らに新風を吹き込めんと腐心するようになった。

追放後 温かいヴェニスで女に酒にカーニバルに酔ったとき 傷心のバイロンは蘇生した。＜流涕の楽園＞に 愛人 マリアンヌと假面をつけ 謝肉祭に夜を徹し 飲みさわいだ。 そのとき ヴェニスで耳にした ある逸話を題材として マリアンヌ を描きつつ《ベッポー》を詩った。

《ベッポー》はヴェネツィア（ヴェニス）の物語として、バイロンが、自らの詩風の転換を切望し苦慮し 作為的に挑戦して成功した作品である。  
フレール <sup>フィッスルクラフト</sup> Frere の《Whistle craft》の作品にふれその詩風に バイロンは 心踊る思いで、これにとびついた。これは イタリア詩風アタバ・リーマで書かれたものである。これこそバイロンの求めて止まなかった バイロンに最も適した詩風であった。

快活に、明るく、<sup>イージー ゴーイング</sup> easy-going に、口語体で脱線を繰り返しながら ストー

リーを自由気ままに展界してゆく ゆるやかなテンポの、お茶の間閑話として  
ゆったりと話すが如く、詩われて しかも 諷刺あり、諧虐あり、とても  
たのしい詩風である。

バイロンは 今、この詩風で《ベッポー》を<格調高く感傷的に華麗なるも  
の>を <くだらぬ、平凡にして馬鹿げたこと>と 諷刺的に並列している。  
効果を狙って、脱線的にストーリーを展開し 女性韻を多用し その特技の冴  
えを披露し、見事に諷刺詩人として転身している。

この転身を機として 諷刺詩人バイロンが誕生し、そして 彼の完全無欠と  
評されるこの諷刺詩、 《審判の夢》が 桂冠詩人 サウジーに敵きつけられ  
る。

かくして バイロンは<わが生涯の集大成>として、この 脱線、諷刺詩形  
によって、 あますところなく、自らの意中を、人生批評、社会批評として、  
《ドン・ジュアン》を残すことを 晩年に 決意し、大作、長編として 未完  
のままにギリシャ遠征に生命つきる日まで 詩いつづけたのである。

1818. 12から1819. 1月にかけて《ドン・ジュアン》第2篇を書いた頃の、  
バイロンはたしかに、心身共に疲れ果てていた。

いかにも 世界は その軸によって廻り  
それにあわせ人は皆 丁半の賽をふる  
生きて愛し 死に おのおのの税を拂い  
風向きが変わるとき 帆もその向きを変え

王は命を下し 藪医者らはほらを吹く  
坊主は 説教し そして人の世は息づく

かすかな呼吸<sup>いき</sup>を 酒を 野望を 名声を  
戦いを 帰一を 塵を 虚名を

その頃の疲れ果てた心情をうたう。

三十にして      すでに白髪  
(四十の日は      いかに  
仮髪<sup>かつら</sup>をも      我 おもう)  
ましてこの心      青春<sup>ゆ</sup>は逝きぬ

五月の日      夏既に去り  
わが生の      資本と利子は  
蕩盡す      我が魂<sup>たま</sup>の  
不屈の力も      枯れつきぬ

わが恋の      日は去りゆく  
今この身      迷うことなし  
少女 人妻      いわんや寡婦<sup>かふ</sup>の  
美し      ありし 艶姿

憧憬<sup>あこがれ</sup>の      時は終りぬ  
なみなみと      注ぎし酒も  
禁断の      今にしあらば  
我は絶ち      いたずらに  
紳士なる      人のする  
貧欲の      道踏みわけん

(ドン・ジュアン 第一篇)

と、自らを嘲笑し 英国貴族社会の生活を笑殺擲擲し 人生畢境一場の夢と彼の諦め 宿命観を吐き棄てた。バイロンは疲れ果てていた。だから疲れ果てた心を 有りの儘にその儘に 命盡きんとして吐き出したかった。

《ドン・ジュアン》はバイロンの吐血である。 その唄はバイロンの最後の美しい鮮血そのままの流露である。

我が友よ      星を讃え  
 汝が生は      かく過ぎゆくを  
 ひたぶるに      聖書を読みゆき  
 ひたぶるに      小金を貯めよ

バイロンは疲れていた。己れの疲れきった生活を 行詰った歌風を 若き日のバイロンの あの チャイルド・ハロウルトの古い衣を脱ぎ棄てて 新しい衣へと どうにか衣更えした。 蚕の脱皮<sup>くさ</sup>の苦しみ、それが《ベッポー》《審判の夢》《ドン・ジュアン》の綾織りとして織り継がれていった。

それから＜風向き＞は1819. 4月の初旬に変わった。それは ＜逆風＞ではなく＜順風＞へと変り、薫風が颯々と吹き始め そして 彼の生命は突如として ＜愛＞を ＜献身＞を多量に発散し始めた。

1817. 11月 バイロン家の居城たるニューステッド僧院を売却し、——幼少年時代、生い育った 最も懐しい故郷、そして 祖先の墳墓の地 とのわかれ、それは いとも哀しい、バイロンの袂別 絶縁の決意 心情であった、——94万5千円（当時の金で）近く金が入り、チャイルド・ハロウルトの一篇だけでも一万円以上の収入がある。妻との別居条件としてアナベラの収入のうち年5千円はバイロンのものである。生れて始めて バイロンは預金をもつようになった。 それにイタリアの物価は格別に安く、今やバイロンは イタリア有

数の富豪となった。

かくて すべての条件がバイロンをヴェニスに招きつつあった。

彼は運河にのぞんだ大きな家を借りた。〈モチェニーゴ御殿〉と呼ばれる家である。サン・マルコからゴンドラに乗って グランド・キャナルに行く見物客は右手に三層楼の石の家を見ることができる。同じ名をもって呼ばれる三軒の家の三番目の家をバイロンは借りた。 彼はこの大邸宅に忠僕フレッシャー、22才のマルガリータというバイロンのハントした美しい原始的イタリア女性、（夫はパン屋で、当時、バイロンの愛人であったマリアンヌを追し出して遂に居坐ってしまった）、新たに召し抱えたゴンドリア（ゴンドラの船頭）の八字髭のティータもいた——バイロン死後 地中海旅行の際 ディズレリーがを見つけ英国に連れ帰った男、かなり大男で腕も強いが、女にかけてもしたたか者であった。そして 追放直後、傷心のバイロンとみずから名乗り出て情を交わした、クレアー（シェリーの義妹）との間に生れた、バイロンの娘 アレグラも シェリーが彼に引渡し住んでいた。

その他 多勢の召使たちを抱えていて、 謂うなれば ハレムの如き豪華栄耀の生活であった。そして淋しがり屋の、 バイロンは—— 家の中にいろいろの動物、ブルドッグ、猿、狼、狐、鷺鳥、鸚鵡、猫、馬、孔雀、鷹鷄、等々、を飼育していた。

今や金はある、そうして、イタリア語は バイロンの最も得意とすることばである。

ここにバイロンの一生における最も放縦な遊蕩の日が始ったのである。金にまかせて町の風雅な茶亭に美人を集め宴遊した。

ブルン家の祖先の血が、あの遊蕩児、父、〈マッド・ジャック〉の、大伯父五代バイロン、〈悪殿様〉の、放縦遊蕩の血が騒ぐ。 それは名門ブルン家に

流れたドス黒い血をそのままに受けついだバイロンのもって生れた哀しい性でもあった。バイロンは 父祖伝承の底知れぬ奥深い血をうけついだ詩人である。

英国の厳しい環境を離れ 人目のない異郷にあつて、南国ヴェニス の 明るい陽ざしのもとに 異国の美しいなまりをもつイタリアの女性のあたたかさに バイロンの心身が、<sup>と</sup>蕩けゆくのは当然の理であった。

バイロンにはつねに＜止まり木＞が必要だった。妻アナベラに祖国を追われ、唯一人の心の支へとなっていた オーガスタとの仲を絶たれた今、バイロンにとって この酒池肉林のヴェニスでの遊蕩放縦は、哀しい逃避だったのである。そうして ヴェニスは、かかる富める貴公子を誘惑すべき＜かっこうの場所＞だったのである。

妻アナベラから 追放されて＜巨像の足で踏みにじられた心臓＞を抱いて 憂鬱な心を 悶々とのたうち廻ったバイロンにとって、このヴェニスの地は＜マイ・ホーム＞だと しみじみと 休らぎを、寛ろぎを、感じる。

寂しさは いま彼を駆って 遊蕩の世界に没入せしめた。しかし この遊蕩の一時期が 彼をして バイロンをして 《マンフレッド》の絶望を脱して 《ベッポー》の明朗 洒脱に転ぜしめ 遂に《ドン・ジュアン》の人生批評、社会批評として 見事な大輪として結実する。這般の事情は バイロン文学の評価において 我々は 決して 見逃すことはできない。

バイロンは＜経験＞によってのみ詩を書く。瞬間瞬間を直視して 体温にしかと感じとって その瞬間、詩い始める。大衆凡愚とともに笑い、泣き、怒り、喜び うたう。だが 彼の心はつねに白であり 偽ることなく 誠実である。そして 力強く 情熱的に その思いを、熱き心を 活火山の如く 読



者大衆に 吼える如く 訴える。それがバイロン文学の、大衆の心に溶けゆく、しっかりと惹きつけて離さない 魅力である。

キーツは＜靈感＞によって詩う。神の声によってうたう。だから 読者は神の声をきかんとして じっと耳をすまし キーツの詩声の夢幻にきき入る。

キーツがかつて「バイロン卿の詩とちがって私の詩は詩神の住む 聖なるヘリコン山の 浄らかな泉ヒポクリーンからの一滴を掬って うたうのだ」と言ったとき、バイロンは、「その泉の水は ジンを水で割ったようなものだよ」と あっさりと ポツリ 一言もらしている。

1812. 1818. 12月、ヴェニス、モチェニーゴー御殿にはるばる息子連れてバイロンを訪ねてきた顧問弁護士ハンソンを涙を流しながら 抱きかかえんばかり懐しみ迎え、歎んだ。

「よくまあ、こんな速くまで来てくれましたねー。」 バイロンの両眼には涙がいっぱい溜っていた。バイロンはハンソンにロンドンの人々のことを根ほり葉ほり 聞いた。

ハンソンの眼に映ったバイロンは いまだ30才にしてすでに双鬢に白髪、かつてあの雪花石膏<sup>アラベスク</sup>の顔色はすっかり失せ 蒼ざめ 膨らみ 血の気を失っていた。ピアニストの如き美しい手も 脂肪ぶとりで丸くなっていた。

バイロン自身も そのことを痛感し 当時彼の詩った《ドン・ジュアン》第一篇において（前述） 青春のうつろい易きことを、＜三十にして既に白髪＞と描いている。

そして みずから<sup>あざわら</sup>を嘲笑い 英国貴族の名を、黄金のみなる生活を、笑殺

し、〈金は権力と快樂とを与える〉と偽惡的なことを云って歎ぶのである。  
 (バイロンが金銭にいかに無頓着であったかは彼の生涯を通じて彼の、知友、  
 万人の認めるところであるのに。)

バイロンは〈功成り名を遂げることのいかに虚ろなるか〉を熟知していた。  
 進んでドン・ジュアンはうたう。

功名の	偶像もまた
哀愁と	快樂 <small>けらく</small> の社前に
潰れ去りて	跡形もなし
修道僧の	塑像のもとに
刻まれし	文字の如く
われは言わん	
時はあり	時はありし
時すでに去りぬ、と	

若き夏の日を 盛りを空しく 快樂と哀愁のすぎゆくまに 身を委したる  
 のち、来るものは 痛恨 悔悟、そして 後、千古に残る数行が続く

うたてしや	頼むに足らぬ
紙の上の	名を求めんと
筆をとり	舌をば揮 <small>ふる</small> い
教壇に	軍 <small>いくさ</small> の庭に
人の子は	力をつくし
小夜ふけて	寝ねもやらず
燭を切り	詩文をこらす。
白骨と	化して後に
かち得たる	報いは何ぞ

空名と	悪画のほか
おぞましき	彫像 ひとつ

汗して打建てる大事業の諸活動に忙殺される社会、詩文創作の世界、人の世は畢竟、何であるのか。歴史に残る空名、そこここに建立されたブロンズの像、それをつらつら思うとき すべて 一場のはかない夢ではないのか。笑うべし 慄れむべし と バイロンは 憶う。ゆえに ドン・ジュアンは 慰めて うたう。

<sup>まこと</sup> 真なる	哲理を賞ずる
われなれば	みずから <sup>おし</sup> 諭ゆ
物はみな	死ぬべく生まれ
肉はみな	草となるなり
<sup>な</sup> 汝が春は	楽しく去れり
かえり来ば	またかくあらん――

それが バイロンの諦観であった。(前述)、1818、4月初旬に <風向きは変った。それは逆風でなく 順風へと変った。颯颯と薫風が吹き始め 愛と献身を多量に発散し始めた > と書いた。

実は――そのとき バイロンは 若き17才のテレザ・グイチョーリー 伯爵夫人と恋におちいり その<sup>キャバリエール・セルヴァンティ</sup>随身の騎士 となっている。美しく明るい女性で、ラヴェンナ貴族の娘で16才まで修道院で、貴族の子女のエリート教育をうけ、それが終ると直ちに 富める夫、グイチョーリー伯爵に<sup>かたず</sup>嫁けられたのである。

父はラヴェンナの貴族ガムバ伯爵であるが、大家族を抱え、テレザは愛のない結婚を強いられるが イタリアの娘は このような結婚には慣らされている。当時の習慣としてイタリアでは 女は結婚後一年経てば一人に限り<sup>シシスベオ</sup>愛人

をもつことが公然と許されていた。そして、結婚は単なる形式であり、この愛人を自ら選ぶことこそ女の一生の最大事であった。彼女も結婚後一年は神妙にしていたがその期間が経つかたにぬうちにバイロンに出会った。バイロンは彼女を一目見てたちまち恋におちいり、自分の恋情をつたえ以後は毎日のように会うことになる。

大理石のように白い頬、栗色をおびた房なす金髪、若々しい美貌、それにフランス語は自国語と同じほど達者で詩を誦んじラテン語の歴史を引用し、絵をかいいた心の温かい、明るい才媛であった。そして＜恋のために生命をすてる女＞であった。故にテレザはバイロンに軽々しく許すことなく、バイロンに対して永遠の愛人としての、隨身の騎士としての誓いをたてさせた。

自我の強い、気儘な、天依無縫のバイロンにとって、テレザの提示したキャバリエール・セルバンテであるための二つ条件、＜一生イタリアを去らざることを誓うか＞＜自分の行くところへはどこへでも従いてくるか＞に対して自由人なるが故にいずれもまことに難題であった。はたと当惑した。しかしバイロンには、行詰っていた現在の心境にとって是が非でも＜自分の止まり木＞＜心を休める憩いの場＞がなくてはならなかった。テレザの胸にバイロンはそれを求めた。即ち、モチェニーゴ御殿での乱行は逃避のための＜哀しい擬態、偽悪＞に過ぎなかった。

Byron is poor! かわいそうなバイロンよ、

かくしてバイロンはテレザのキャバリーエール・セルバンテとなる。

テレザと契ることによりバイロンの周囲は今颯々と薫風が吹き始めた。流謫の地にあって＜最後の樂園＞として＜愛＞と＜献身＞の生活が始まるのである。

バイロンが13才のとき、愛児バイロンを溺愛した母キャサリンは<sup>うらない</sup>卜占

の女に わが子の将来を判断してもらったとき <バイロンは二度結婚する。二度目の婦人は外国人である>と語った。今、迷信的なバイロンはそのことばを しみじみと思い起こしていた。

テレザは夢の如く バイロンに恋した。彼女は 純情的な、没我的な、そうして 詩趣横溢の性情であり、軟かい春風の如く つねにバイロンの苛立ち易い神経を鎮めてくれた。彼女はイギリスの女のように、理知的に 客観的に男性を解剖、批判することはなかった。詩のように 美しく愛人を脳裏に描いた。彼女は 空想的なバイロンを自分の心の絹に描いたのである。世界一の詩人、熱情的な恋人、彫刻的美貌の貴公子、それが彼女のバイロンであった。

その慕情の切なるものがバイロンの敏感な感能に反映して 無心だった幼少年の日を彼の心底から蘇らせつつあり バイロンも 古都ラヴェンナにあって とても幸福であった。

バイロンは彼女と接吻を交わし、その後、ゴンドラに招待し舟遊びに興じた。そして 自分の借りている室（それは彼がお抱えの売春婦達を抱いた）の、その隠れ家で情事を楽しんだ。——もっとも、このことを テレザが知れば とても当惑したことだろうが——。

バイロンにとって 今や テレザの存在は<彼自身占有の美女ヘレン>として全生涯における最高に美しい 理想化された女性 となった。斯くて二人は 無我夢中の、真に昇天のムードの中に耽溺し得た愛の交歓の日日を重ねた。

テレザの場合、バイロンが彼女を虜<sup>とりこ</sup>にしてしまった。彼女は真逆様に恋の深淵に落ちていった。

ジュアンの最初の愛人ジュリアンが放った確信に満ちた、あの文句をテレザなら理解し得たであろう。

男にとって 愛は  
 その生命とは  
 切り離される 一部でもあっても  
 女にとって 愛は  
 その存在の すべてである

テレーザは世の慣習に 囚われない奔放さをもった女性で バイロンを情熱的に恋したカロライン・ラムにそっくりであった。

バイロンはテレーザに 書き送った

「君は僕のものだ。そしてこれからの二人の仲が どうなろうと、僕は永遠に君のものであることを誓う」と。

1819年 31才になったバイロンはテレーザ・グィチョーリー伯爵夫人の〈随身の騎士〉としてヴェニスを去り、ボローニアへ、そしてまたラヴェンナへと移る。

ラヴェンナは 退廃的ヴェニスと異って 活気にみちた街である。 1814—15年のウィーン会議は 〈会議は踊る。されど会議は進まず〉といわれ難航したが、ナポレオンのエルバ島脱出で急ぎ調印された。以後メッテルニヒ体制の下に 結局 自由主義や、弱小国の民主主義は 強国の犠牲となり、ラヴェンナはローマニアの一部として オーストリアの専制政治の下にそれを提唱したローマ法王の政治によって支配された。しかし ここには 今独立の気運が漲っていた。

バイロンは国家主義者の間で 影武者的存在として 自ら活動していることを自覚する。この愛国者達を代表するものとしてガムバー家があり、そしてテレーザの弟ペトロは、特に熱血的闘士、愛国の士であった。

バイロンは6月、ボローニャのペイルレィグリーノウの宿に着き娘アレグラ

をヴェニスから呼ぶ。テレーザからの連絡を待つがその手紙がまだ来ていないこと知る。結局それはテレーザが肺の病重く死線<sup>きまよ</sup>を彷徨っていることが判明した。そのことを知ったバイロンは最も信頼した専門医に直ちにテレーザの診断を乞う。医師の診断は「バイロンが付添うことだけがテレーザの快癒の処置だろう」ということだった。彼はテレーザの許へ急行した。

6月から8月までの間、テレーザに招かれてラヴェンナに滞在。テレーザの病状が回復するにつれ 二人にとって 楽園のような生活が到来する。

二人は海岸沿いに松林を馬で駆け ナイチンゲールの声に耳を傾け 黄昏<sup>たそがれ</sup>の一時を楽しんだ。バイロンの、その波乱万丈の生涯にとって これが最高の流謫の楽園だった。／

常緑樹の森よ、／

僕はこの 黄昏の刻を

そしてお前を

どんなに愛していることか、／

常緑の森であるが故に、若く幼きまでに瑞瑞しいテレーザであるが故に、バイロンが自らの晩年 黄昏の刻をはっきりと意識したが故にこそ このように絶句した。テレーザへの燃ゆる思いが このドン・ジュアンの大作への心を、そして 生涯をここまで歩んで来た、その長かった、短かった軌跡をしづかに顧みて 大作《ドン・ジュアン》として 思う存分に 詩いたかった、その心境、詩境を垣間見て 多血質の情熱詩人、叛逆詩人バイロンに今忍びよる哀感と多情を思う。

不朽の名作《ドン・ジュアン》は 確かにテレーザとの真の濃<sup>こま</sup>やかな、そして澄みきった落ちついた 愛の生活の中に見事、＜麗わしき大輪＞として開花したことを思うとき、テレーザの大いなる存在の素因をクローズアップさせなければならない。このことは、声を大にして特筆大書すべきであろう。バ

イロンに大作への最後のチャンスをしずかに与え、《ドン・ジュアン》を賦す心境を与へたのは テレーザであった。

東西古今の名作は すべて 異境の地において書かれざるもの一としてなしと云われる。＜追放の身＞故に 忌憚なき意見を 怖れることなく、 広く 人生批評、社会批評へと毒舌、罵倒、笑殺、慟哭、激怒、憧憬、愛の讃歌を 誰に憚ることなく バイロンは テレーザの腕に抱かれながら あますところなく 絶唱した。それは南国イタリアの明るい地で 瑞々しい愛人を得たことによって、颯々として吹く薫風の中で＜愛＞と＜献身＞が多量に発散し始めた。 テレーザこそ＜生みの苦しみ＞を経た大作《ドン・ジュアン》にとって、ある意味で 最も良き 貢献的女性、なくてはならなかった 存在であった。バイロンにとって詩作はすべて＜行動＞によって＜刺戟＞によって 己が＜経験＞としてののみ その心の投影としてなされた。

テレーザは《ダンテの神曲》を暗<sup>くら</sup>んずることができた。バイロンに《タッソーの歎き》を、彼女の熱烈な乞いによって書かせた。 バイロンとの愛の生活が彼女の恋情によって、豊かな寛らかな 愛の心を生み、そして詩作活動にプラスすることをとても、歛<sup>あ</sup>んだ。テレーザはそんな高貴な、<sup>あたた</sup>かい女性だった。

南国イタリアを心よりバイロンが慕った心境は、ローマ大帝国を築いたローマ人が北欧の雪国から南の陽射しを慕って下りてきたのと同じである。ゲーテが《ウィルヘルム マイステル》の中で

イタリアよ、／ イタリアよ、／  
橄欖の花吹く イタリアよ、／

と唄ったのは、恋する乙女に託して、雪の北国にいるドイツ民族の、明るい南国を思慕するところを賦したのではないか。



雪深いスコットランドに育ったバイロンも 今 流諦の身を 明るい南国に住み、最高の、最後の、理想的、瑞瑞しい、＜独占の美女ヘレン＞としてテレザを得て、その愛の生活の中に、最後の＜流諦の楽園＞の中に＜愛＞と＜コスモポリタン＞の詩人バイロンの詩想は 湧然と湧き出るのである。

1819. 7. 15《ドン・ジュアン》（第一編、第二編）が ジョン・マレーによって匿名出版された。 バイロンは、この、彼自身の物静かな滑稽な作品が如何なる反響を呼ぶか、その批評をきくことを鶴首して待ち望んだ。

詩の真価をポエトリ（詩ごころ）に置き、その有無によって 詩は評価さるべきで、道德性の欠如を基準とする如きは 彼にとって軽蔑すべき空念佛に過ぎなかった。

しかし、《ドン・ジュアン》の詩の美しさを激賞しながらも 大方の批評家は その道德性を激しく非難し攻撃した。 彼らはバイロンの魔法のペンによって あの、《チャイルド・ハロウド》型の美しく妙なる音楽を予期してその誕生を待ち焦がれたのに《ドン・ジュアン》は まさに 二つの黒い眼をもった怪物の出現であった。

そしてバイロンの耳には、それが イタリアに於ても 祖国英国に於ても 激怒の嵐を呼び起こすのが聞えてきた。 そしてマレーも澁面をつくり、ブラック ウッド 誌は 悪意に満ちた数々の評言を載せ 親友ホブ・ハウスすら

これを批難した。《ドン・ジュアン》への執念も、出版者マレーの、作品のモラルに対する不信感故に愚図愚図と延ばされている中に、やっと匿名で陽の目を見たがその诗情豊かなものを世間は高く評価しつつも 《ドン・ジュアン》は 四面楚歌の状態におかれた。

だが バイロンは是が非でも公にしたいと執心した。少とも創作しているとき、他の一切の不安は放念した。 テレーザすら、この出版には最初はむしろ消極的で もっとロマンティックな作品をバイロンに書くよう求め希んだようである。テレザが彼にとって最後の愛人、最後の執心、最後の冒険、最後の情熱故にと彼は自らにその愛を誓う心を反歎しながら、同時に 《ドン・ジュ

アン≫にけるバイロンの熱き思いと執念も 絶ちがたいものがあつた。それはテレザにける思いと全く同一であつた。

テレザは熱心な天主教の信者であつた。そうしてバイロンと共に馬を駆っている時でも 夕刻となつて 遠くの寺々にアヴェ・マリアの鐘の音がなり始めると、バイロンに告げて馬を止め黙禱せしめた。鷲毛の如く軽やかに馬背にまたがるテレザが 清らかに大氣を渡りくる鐘の音の波のもとで、じっと冥目して神に祈る姿を とても いとしいと思つた。

ドン・ジュアンは唄う。

アヴェー・マリーア、	禱りの時ぞ、
アヴェー・マリーア、	愛の時間ぞ、
アヴェー・マリーア、	こいねがわくば
われらの霊をして	仰ぎ見しめよ
神の御顔と	神の子の御顔、
アヴェ・マリーア、	うるわしの顔 <sup>かんばせ</sup> 色
全能の鳩の下に	伏目する眸よ
描ける聖像は	偶像 ならず
今この眸	あまりにも以たる。

バイロンは 神秘的な天主教に強くひかれた。今 バイロンの霊を鎮めるものは天主教であろう。それはロンドンで既に炯眼なウォルタースコットもこれを読取つて、そのように予言した。

とにもかくにも、この南国の明るい太陽のもとで テレザというすばらしい愛の絵巻を繰り展げる、そのすべての好条件の中で、《ドン・ジュアン》の大作への準備構想が、なされつつあつた。

そしてこの名作が空前絶後の諷刺詩として ゆったりとした、おおらかな、洒脱な 流麗にして キビキビとした、ライムで ゆったりと道草を食む如く コスモポリタンの愛の思想を多分に発散していったことは確かである。

今 バイロンの、この大作《ドン・ジュアン》の文学的価値を評価する前に、詩人バイロンが真のコスモポリタンであり 常に、完全な世界を求めて歩く＜永遠の巡礼者＞であることを銘記しつつ この観点において《ドン・ジュアン》の名作は 涙と笑いをもって読まれなければならないだろう。

《ドン・ジュアン》の文学的価値とバイロン自身の人間関係を考えるとき、既述の如く、この作品を以てミルトンの<sup>パラダイス・ロスト</sup>《失樂園》以後、英文学の最高峰に立つものである。この作品はバイロン生涯の総決算であり バイロンの不思議な、奥知れぬ性格、不思議な性格、数寄な運命の所産であると言えるだろう。

即ち、《ドン・ジュアン》の評価は バイロン自身の評価に他ならぬ。バイロンの最大の特徴は 徹頭徹尾 主我的であり 強烈な個性をもって生れ——バイロン家、ゴードン家の両家の強烈な血統をそのままに継承し——それを大胆不敵に発展させ、その発展させた個性を無遠慮に作品に投影したものである。

《ドン・ジュアン》は 強烈な個我の詩人バイロンの晩年の姿であり その投影のすべてである。

勝手気儘にストーリーを離れ横道にそれ、キャッスルレー卿の外交を批難するか と思へは、転じて 桂冠詩人サウジーを罵倒笑殺し、更に転じて、妻アナベラを筆註し、三轉してギリシャ義勇軍を謳い、 英国貴族を揶揄する。猫の目の如く変り 風見鳥の如く風向によって変るバイロンの心の投影である。

もし、バイロンの人間性が月並にして単調であるならば《ドン・ジュアン》は 読者は倦怠感を抱き半ばにして投げずてであろう。それが自己表現でありながら最後まで読者をひきつけ ひきずり込み 世界の読者を魅了する。そ

れが《ドン・ジュアン》でありバイロン文学であり、その因は バイロン自身の底知れぬ複雑な 天性からくる 魔術であり 魅力である。

バイロン詩《ドン・ジュアン》の魅力のもつ複雑奇怪な調和は 数学者の妻アナベラには 到底、解明し得なかった、格別に不可解な、バイロンの性格に由来するものである。奥底をつきとめることの出来ぬ 深いものであった。言いかえるならば、それは 矛盾撞着し、しかも千変万化してプリズムを通した光りとして興趣横溢、 神技爽然として 複雑な外界の現象を、原因を、変化を、鋭く感受し得るバイロンの力に由来するものである。この力量なくして到底叶はぬ神技である。故にゲーテがバイロンを＜英文学史上 最大の才幹＞と激賞し《Faust》<sup>フハウスト</sup>（第Ⅱ部）において Faust と <sup>ヘレン</sup>Helen の息子 <sup>ユーフォリオン</sup>Euphorion の姿の中に バイロンのための記念像を打ち建てた。Faust は ロマンチズムを、ギリシャの美女ヘレンはクラシズムを表すものであり、この両者の愛児としての＜ユーフォリオン＞こそ＜バイロン＞像であり、バイロン＜文学の本質＞を示すものである。

遊蕩の限りを盡くし、世の掟を無視したバイロンは確かに背徳者 と批難されようとも＜自己を偽わず 信念のためには水火も辞せず所信を表明し敢行して、＜内心不道德、外見有徳＞な 貴族階級に、退廃した社会制度に叛逆した、自由の戦士 バイロンを、万人が、おおらかに 豊かに 大乘的観点からしかと認め 絶讃して 憚ることはないだろう。

《ドン・ジュアン》はそうした、大器バイロンが、自由の旗を高らかに掲げ、永遠の巡礼者として＜己を救い世を救う＞遍歴の旅をした、謂ふなれば愛の軌跡であり、 バイロンが自らの手で描いた、そして後世に遺した 見事な自画像であった。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge. The Poetical Works of Lord Byron: Lewis  
Prints.
- 3) Leslie A. MArchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadic Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂。